

アイロン

「ブルー、イエロー、グリーン、ピンク！ ……くそっ！」

湾岸地区の貸倉庫群に男の声が響き渡る。晴天の波穏やかな日、人が閑散とした倉庫。その声は平凡な日常では決して感じる事の無い必死で悔しさの混じる声だった。

「人は一人で何も背負えない。人は一人で何も成し得ない。人は一人で生きられない——レッド、貴様も例外ではない」

赤を基調としたスーツに覆面をつけた男——レッドは背後からの声に武器を携えて振り返る。レッドの手には赤と金で飾られた銃剣。そしてレッドと対峙する相手の手には成人男性程の大きなメイス。先端の紫色の珠が暗い倉庫で鈍く光る。

メイスを持った相手の姿は異様だった。悪魔を彷彿とさせる禍々しい黒い鎧、角、羽、尾。その男はレッド達が今まで対峙した中でも別格な風貌と迫力を備えていた。

「リーダーである貴様と一度話がしたくてな。結社アルカナも私——『ザ・ワールド』しか残されていない。貴様達の活躍でここまで追い込まれてしまったのだ」

「お前もその一途を辿るんだ！」

レッドは素早く引き金を引く。魔法で強化された弾丸が倉庫内を明るく照らす。しかしその光はザ・ワ

ールドのメイスで容易くかき消される。それどころか紫色の球が一層輝き、レッドの放った以上の力で光弾を放つ。

レッドは距離を詰める事を選択した。地面に掠りそうな程の前傾姿勢で、銃弾に対する表面積を少なくしての接近。

遠距離戦は不利だと悟りの接近戦。ザ・ワールドのメイスに受け止められ、激しい火花を散らす。

「その程度の力では私には勝てないぞ！」

言葉を証明するかのように鈍重なメイスを槍のようにしてレッドの剣を捌き、先端の珠でレッドの身体を刺す。重い衝撃にレッドは意識を失いかける。さらに零距离で光弾が放たれ、レッドは腹部の衝撃と飛ばされた際の摩擦熱で苦しんだ。

「貴様がかのように苦しんだ所で、のうのと暮らす一般市民は守られている事も知らずに生きているだろう。……今の人類は一人では生きられない悲しい生き物だ。私もその一人だった。——だから私はこの世界を壊す。他人の夢を壊し、己だけで夢を掴ませる力を与える。輝かしきかな、素晴らしき事かな！ 実現できるのなら私は喜んで礎となるろう！」

「世迷言を、言ってるんじゃないや、ねえ！」

レッドは息絶え絶えにありながら、気丈に立ち上がり相手に向かう。

「人はそれぞれ自由であるべきだ！ 強い事も、弱い事もある。でもな、その弱さが強さになり、逆に強さが弱い事にもなるんだ。だからこそ人は夢を描き、現実を共に歩むべき人と手を重ねる事ができる。お前の言ってる夢は輝き溢れるものじゃねえ、悪夢なんだ！」

一直線で向かうレッドはメイスの攻撃をかわし背後に回り込み、ザ・ワールドに左肩から右腰部にかけての袈裟斬りを与える。しかし直前でレッドの意図に気づいたザ・ワールドは一步前に出て傷を浅くし、メイスをバッドのように背後のレッドに振り回す。レッドは下に剣を構えたまま低姿勢で相手と同じ方向に周り、下から上に向けての魔法を込めた斬撃で背面の傷と同じ様な深い傷跡をザ・ワールドに与える。

「勝った方が正義であり、夢を叶えられる。強さがなければ何も成し得ぬ！」

ザ・ワールドを守るように紫電が迸る。レッドは間一髪かわし距離を取る。貸倉庫内の荷物が紫電で燃え、赫々たる火の熱さがレッドをじんわりと蝕む。さらに紫電に包まれたザ・ワールドの傷口が塞がっていない。

「誰かが守ってくれるというくだらない願いより、自分の身は自分で守れという方が断然正しい。戦う事を放棄して死に逝く事は何よりも愚かだ」

「罪の無い一般人をアルカナの手先にして、自ら戦わずに高みの見物をしていたお前は自分で守ってきたと言うのか！ お前の理想で夢を語るのなら、自身の言葉を振り返ってみるんだな」

レッドの全身に紅蓮の炎が立ち上る。倉庫の火とは比べようにならない程の精錬とされた炎の魔力。身体中に力が漲り、銃剣に炎が吸収される。レッドはこの一発で相手に致命傷を与える事を決意した。壊滅寸前に追い込まれたアルカナの下っ端と戦っている仲間が苦戦しているはずで、援軍は期待できない。レッドがこの場でザ・ワールドを倒すしかないのだ。

「ザ・ワールド、覚悟しやがれ！」

裂帛の気合と共に、レッド自身が一つの火弾となるような突進——流星紅体メテオストライクでザ・ワールドを滅ぼそうと

する。だが、

「——その一般人が自らアルカナの一員になっていたとしてもかね？」

ザ・ワールドの短い一言がレッドの心を大きく揺さぶった。その動揺は炎にも、動きにも表れた。炎は倉庫内の揺らめく火のように劣化し、先程までの鋭さは身体中の震えで精細さを欠く。

ザ・ワールドは悠々と魔法を展開。レッドの真下と真上に複雑な魔法陣が描かれる。反時計回りに回る真下の魔法陣、時計回りに回る真上の魔法陣。

カチカチ、カチカチカチ——カチツ。

型に嵌まったような音、レッドにとっては死の宣告に聞こえた。

死にたくない、とレッドは先程のザ・ワールドの言葉を吹き飛ばすかのように心に一言。その一言は瞬間に身体の隅々まで伝播し、死を恐れる本能に流されてありつたけの魔力を防衛へと注ぎ込む。卵の殻のように火で包まれたレッドに、ザ・ワールドは笑みを深めて告げた。

「ザ・ワールド世界の逆位置——志半ばで挫折せし失敗者に破滅の停滞を！ ワールドプリズン天牢雷獄」

魔法陣の外周に沿うように紫電の殻が覆われる。魔法陣の中央でもレッドを閉じ込めるようして魔力の牢獄を形成する。魔法陣がレッドの身体も伴って浮かびあがる。ザ・ワールドの真上まで移動した紫電の二重牢獄は詠唱者の合図を待つ。

「結社アルカナは自らの意志で他者に力を与える世界の構築を目指した集まりである。力ない事を嘆き、

そして力に変えるべく動き出した先駆者だ。口先だけで動こうとしない輩にも遍く力を与え、この世界を激動させる。私——ザ・ワールドは志半ばで潰えた同胞の夢を正位置へと導く義務があるのだ！」

ザ・ワールドの決意と共に牢獄が動き出す。ザ・ワールドのメイスから放たれる魔力を魔法陣が吸収、そして倍加しての電流地獄が始まる。レッドは叫び声をあげる事も儘ならず倒れる。

「貴様の正義の力というものは便利だな。その強固な自動魔力防壁で時間稼ぎされ、反撃の好機を掴まれていた。同胞を滅ぼしたその正義の力は我らにとっては悪なのだ。貴様の大好きな言葉であの世に送ってやろう——悪は必ず滅びる、とな！」

激しく音を鳴らす電流にザ・ワールドのけたたましい哄笑。倉庫内の火の手が景色をより一層凄惨なものへと彩っていた。

レッドのスーツが徐々に破れていく。魔力が失われ、レッドと呼ばれた青年の顔が露わになる。整った顔立ちは苦悶の表情を浮かべ、口からは音にならない声をあげている。レッドの身体からは赤黒く変色した火傷が生まれ、傷口が大きく広がっている。

「そのまま焼かれ、命潰えるが良い。貴様の仲間も等しく牢獄に放り込んで——ぐぬっ！」

レッドの死にゆく様を楽しんでいたザ・ワールドに色鮮やかな光弾が放たれた。ザ・ワールドの持っていたメイスが彼の手から離れ、レッドを閉じ込めていた牢獄が解除され、重力の赴くままに落ちる。レッドは落下時の痛みに備えていたが、その痛みの代わりに優しく包み込む安堵が訪れた。

レッドは滲んだ視界の先に見える相手に向かって苦笑した。

「よう、遅かったじゃねえか」

「リーダーが突っ走ったからだろ。おかげで俺達はボロボロだ」

変身が解けたレッドと同じ様な制服を纏った男がレッドに笑みで返した。彼の言葉通り、風体は破れたり、焦げたり、穴があいたりとみすばらしい。しかし彼の眼は熱く燃え上がっていた。勇ましい彼の姿にレッドは誇らしさを感じた。

彼の後ろには三人、ザ・ワールドにありつたけの銃弾を放っていた。

全員、若い男女だった。レッドを介抱した男はゆっくりとレッドを地面に横たわらせ、倉庫の壁際に追込まれたザ・ワールドに向かって言葉を発した。

「よくも俺達のリーダーをこんな目に合わせてくれたな。ここからは俺達が相手だ！ 行くぞ、イエロー、グリーン、ピンク！」

ブルーの掛け声と共に光り包まれた四人。包んでいた光が消えると同時に彼らの恰好は、先程までレッドが身につけていたスーツと覆面が変わっていた。違う点は身に纏う色で青色、黄色、緑色、桃色に変わっており、武器も金色だけ残して変わっていた。

「レッドが再起不能な中で、お前達が相手か。アルカナの正体を知ってあっさりとやられてしまったレッドの仲間達よ、無様で不甲斐ないリーダーにまだ従っていくつもりか」

ザ・ワールドの問いかけに四人は無言で武器を向ける。彼らの心は既に決まっていた。

「一人では出来ない事がある。だが二人ではどうか。三人ではどうか。四人ではどうか。そして五人ではどうか。リーダー一人で倒せなかったとしても俺達なら倒せるかもしれない。人の可能性というのは繋がっていく事で無限に広がるんだ！ 俺達五人、揃ってこそその戦隊だ。行くぞ、ザ・ワールド！」

「面白い。レッドの目の前で無残に散っていく仲間達……ああ、面白い！ アルカナの同胞へ良い贈り物になる事間違いない！」

ザ・ワールドは落としたメイスを拾い、武器を構える。これから始まるはアルカナとの最終決戦。果たして、彼ら、そして地球の運命はどうなるのか！

【To be continued…】



「——という事で、これが次回の研究対象だから」

狭い部室で高校の制服を着た女子がもう一人の男に向かってぶっきらぼうに言った。男子はその物言いに反発した。

「研究対象ってただの戦隊物じゃないか。……そもそも学校で観るもんじゃないぞ、これ」

先程の熱く盛り上がる終わり方とは打って変わって、明るいエンディングが部室内で大きく流れている。貸倉庫内よりも暗い部室でこの大音量は、規則正しい生活を送ってきた男子にとってはかなり毒であった。

女子は大仰にため息を吐いた。華奢な体つきからは想定出来ない程の本当に大きなため息だ。つまり女子はこの男子を馬鹿にしているのである。

「家にビデオデッキがないって言うから、ゆきちゃんに頼んでビデオデッキ付きテレビ持ってきてもらっ

たの。この部活でビデオデッキも持っていないのは貴方ぐらいのものよ」

過去の産物となってしまうたビデオを持っていない事で、どうしてここまで馬鹿にされるのかと男子は憤慨するが。女子は気にしないで話を続ける。

「それに戦隊物にしては中々に奥深かったでしょ？ 第四十九話『相剋のロード』——放映当時はあまりの過激な内容に全国の奥様方が抗議したらしいけど、次が最終回だった事もあり、無事最後まで放映出来たの」

「次が最終回と見越しての暴挙だったんだな。逃げるように最終回か」

エンディングが終わり、次回予告が流れる。今までの戦闘シーンを切りぬき、そして最後に必殺技のシーンがちらっと流れて最終回の題名——『未来のロード』と告げて映像は終わった。

「戦隊物だから最後はどうなるかは予想できると思う。しかし私達が求めているのはこの悪者の夢について考える事。夢と夢はぶつかり合うもの。それは正義と置き換えても良い。尤も、最近の創作物では悪魔等の悪者が主人公で、天使や神様が敵だというパターンが増えてきているから、悪者だけが一方的に駆逐される事は少なくなっただけだね」

「そんな数多くの創作物の中でこれを選んだ理由は分かる。このアルカナの思想は君の好きそうな考え方だからな」

「分かってくれたようで結構。でも私の思想は止まらないから安心してね。……それじゃ明日部室で」部室に鍵をかけ、女子は鍵を返しに職員室へ向かい、男子はそのまま帰路へと就く。

男子は明日の話し合いに向けて幾らかの感想を用意しないといけなかった。しかし最初に浮かんだ感想

は作品ではなく彼女の事だった。

——でも私の思想は止まらないから安心してね。先程の彼女の言葉だ。

「——そりゃ、止められないさ。俺達に明確な敵意を向ける抑止力はない。だからこそこっぴどくやって暴れられる。……もし彼らのように退治する者がいるとしたら、俺達はどくなってしまうんだろな」

男子の独り事は誰に聞かれる事無く、肌寒さを感じる大気へと溶けていく。

季節は春。高校生の男子には似合わない想いを抱く新入部員であった。

あとがき

『相剋のロード』のあとがきとなっております。

本編をご覧になった後でお読みください。

因みに字数はルビ含めてPDF版は計4991字、メモ帳版では計5000字です。

※字数計算方法ですが、PDF版の合計字数はPDF発行前のWORDでの字数でカウントしてます、その次にPDFを発行するという手順です。

メモ帳の字数計算はWORD文章をメモ帳に貼り付けて、メモ帳の文字を再度コピーしてWORDに貼り付けて出た字数で計算しております。

想定していた字数と合わない事がありましたので、このように補足を書かせてもらいました。

ということとで作者アイロン(einrotte)の言い訳タイムであるあとがきが始まりました。

第4作目は御覧の通り『相剋のロード』というタイトルで、少しカッコよくしてみたいという想いでつけました。

さて、私の他の作品を読んで下さった方にはお分かりの通り、あの二人らしき人物が出てきます。何となく登場させてみました。

何となくと言いながら登場させるかどうか結構悩みましたが、大丈夫かなと思って登場。おかげで字数が予定よりもきつつきつに。

『相剋のロード』を踏まえての彼らが後に綴られています。ここではメインの『相剋のロード』の事を軽く触れます。

これまた他作品とテイストが違うようで、でも結局変わってないのかーと思われるような文章だったかなと思います。

今回意識したのは『動き』です。元々ファンタジー小説(厨二病、黒歴史小説とも言う)から執筆を始めた

私にとっては原点に戻る感じで作り直しました。

ファンタジー的設定を考える事を大人になってもやめられなかったが故にこうして書いてしまいました。楽しいから仕方ないね。

因みに各々の必殺技は読み方が同じ漢字を用いたり、文字一つだけをキャラに合わせた属性に変えたりとしております。これぞ厨二病。

ここで夢についてちよつと突っ込んだお話を軽く。

悪者にも大義名分がある場合があります。彼らの夢は人を多く傷つける事になっても成し遂げたいからこそ悪として見なされます。

正義側にとってはどう聞こえるでしょうか。言い訳、隠れ蓑、世迷言でしょうか。それともどこか甘い響きを感じ取るのでしょうか。

悪者の夢について考えていただけたら幸いです。

あと、試験的にルビもつけてみました。厨二病には欠かせない要素ですね。

字数が増えちゃうので、いつもぎりぎりな字数で仕上げる私にとっては結構辛かったです。頑張って調整しました。

……と、このように最後に頑張ったアピールをしてあとがきを終わりたいと思います。ありがとうございます。

した。